

電力土木の歴史—第2編 電力土木人物史（その7）

正会員 稲松技術士センター 稲松敏夫（技術士）

History of Electric Civil Engineering
— Part 2 History of electric Civil Engineer.

by Toshio Inamatsu.

概 要

筆者は先に第1回～第11回にわたって、電力土木の変遷と、電力土木に活躍した人々を中心に、各河川の水力開発について述べ、その中で電力土木に一生を捧げた人々のうちの代表的人物60名を発掘して、その成果をまとめ得た。さらに7年前からその中40名の人々の業績を詳述し、第2編電力土木人物史として26名（知久清之助、伊藤令二、北松友義、目黒雄平、高桑鋼一郎、久保田豊、内海清温、熊川信之、岩本常次、吉田登、水越達雄、市浦繁、鶴飼孝造、和澤清吉、大林士一、金岩明、大橋康次、山本三男、味埜稔、中村光四郎、浅尾格、永田年、平井弥之助、野瀬正義、畑野正、田中治雄）について発表し、今回はその7として10数名を発表する。（明治～昭和期、土木、開発した人）（1分類 人物史、2分類 河川、エネルギー）

(1) 石川栄次郎



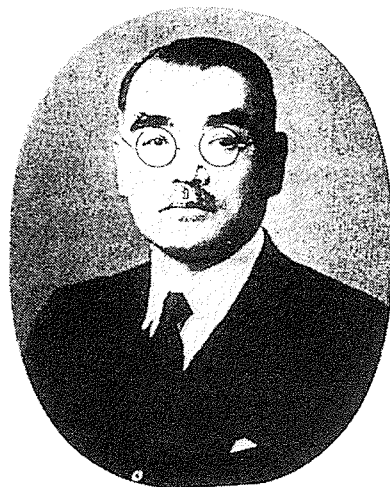
(イ) はじめに

本稿をまとめるにあたり、中部電力(株)取締役土木建築部長宮口友延氏から「電力土木人物銘々伝（中部電力）」「大同電力(株)沿革史」「流れとともに（石川栄次郎傳）」等送っていただいた多くの資料にもとづいて、石川栄次郎の略歴、業績と人となりを掴み得た。心から感謝申し上げます。

筆者が昭和17年10月日本発送電(株)北陸水力事務所（富山）に入社した当時石川栄次郎が、日本発送電(株)、中部水力事務所長（名古屋）として、中部地方の電力界の大御所として君臨していたと安藤新六北陸水力事務所長等から聞いていたのを今思い出している。

(口) 石川栄次郎の年譜

- 明治19年 9月 5日 愛知県に出生
明治43年 3月 名古屋高等工業学校
土木科卒業
明治43年 4月 通信省第14回発電水力調査局入局
大正 3年 2月 名古屋電灯(株)入社
大正 8年 3月 矢作川水力(株)嘱託 (兼務)
大正10年 2月 大同電力(株)入社
昭和 9年 7月 大同電力(株)理事
昭和10年10月 愛岐水力(株)取締役 (兼務)
昭和12年 6月 大同電力(株)取締役工務部次長
昭和14年 4月 日本発送電(株)入社
5月 神岡水電(株)取締役 (兼務)
10月 東美鉄道(株)取締役 (兼務)
昭和17年 3月 日本発送電(株)定年退職
4月 同社嘱託 (中部水力建設
事務所長 事務取扱)
7月 理事待遇 (同上)
昭和18年12月 同上 (建設局名古屋出張所長)
昭和19年 5月 理事 (同上)
昭和20年 4月 理事 (東海支店土木部長)
昭和21年 4月 理事 (東海支店長)
昭和23年 5月 理事退任 嘱託
(東海支店長、理事待遇)
7月 理事 (東海支店長)
昭和26年 5月 中部電力(株)取締役
副社長、開発部長
昭和27年 5月 中部電力(株)取締役副社長
建設部長
昭和20年12月 電源開発(株)佐久間建設所長
(理事待遇) (兼任)
昭和28年 5月 中部電力(株)取締役副社長解任
6月 電源開発(株)理事就任
中部電力(株)取締役
技術監督
昭和30年秋 藍綬褒章
昭和31年 5月 中部電力(株)顧問就任
昭和34年 9月 逝去 (72才)
正六位 勲四等瑞宝章



大同電力(株)取締役工務部次長時代 (昭和13年 6月)



石川夫妻といだかれているのは長男俊夫ちゃん
(大正 3年)



前列向って右から妻なを、次女房子、石川栄次郎、
長女澄子、後列右より三男禎三、四男泰平の皆さん
(昭和10年)

(ハ) 業績と人となり

昭和25年秋、翌年5月1日新しく発足する中部電力の初代社長に就任することが内定した井上五郎は、2人予定された副社長の1人として、日本発送電の理事であり、今渡発電所（木曾川）建設のための愛岐水力（東邦、大同両電力の共同出資、10年設立）設立交渉を通じて旧知の間柄だった石川栄次郎を指名した。

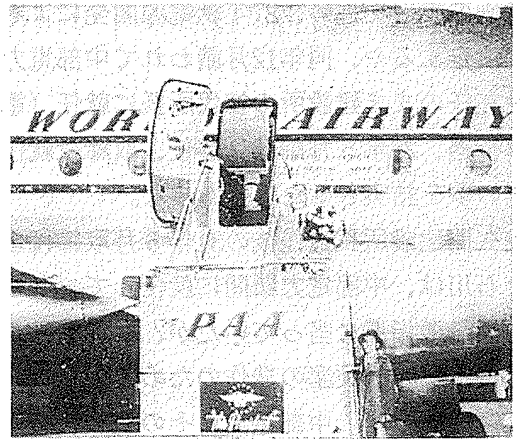
石川は、初の全国的な水力資源調査である第1次包蔵調査が始まった、明治43年春、名古屋高等工業を卒業して通信省発電水力調査局に入り、名古屋支局の主管技手として、中部地方各水系の調査、発電計画策定に従事してから50年「ダムの鬼」と呼ばれるほど、水力電源の開発一筋にその生涯を捧げた人であった。

石川は、近視のため海軍兵学校を断念して進学した名古屋高工、土木工学科で、吉町教授（後九州帝大教授）の発電水力の講義に感銘を受け、この道を選ぶ決意をしたと言われているが、発電水力調査局入りについては、彼自身、山が好きで「水力調査の仕事なら、官費で存分に山歩きができるから」と後年語ったということである。

5年計画で始まった第1次包蔵水力調査が、情勢の変化から3年に短縮されて終わった大正3年2月、石川は、水力調査局時代の上司、杉山栄に誘われて木曾川開発に本格的に取り組むため「臨時建設部」を組織した名古屋電灯へ入社し、八百津発電所の改良工事を振出しに、一連の木曾川水系電源開発の第一歩を踏み出した。

大正7年、名古屋電灯の水力発電と製鉄製網部門が、分離独立した木曾電気製鉄（後木曾電気興業）へ移籍。

次いで大阪送電などの合併によって生まれた大同電力、さらに日本発送電から中部電力へと所属する会社の名前が変わっても、石川は常に水力電源の開発に情熱を燃やし続け、大井、三浦、丸山、朝日、佐久間とその時どき中部地方を代表する多くのダムを造り上げて我が国の水力発電史上に輝かしい足跡を残したのである。わけでも佐久間地点「天竜川」については、大正年間から大規模開発の適地であるを確信して、ダ



第二回渡米出発、羽田空港にて
(昭和28年11月6日)



第二回渡米名古屋出発、自宅前にて
(昭和28年11月2日)



守山市喜多山の自宅花畑にて 石川夫妻

ム計画の検討を進め、27年秋電源開発による開発が決定するや、同年12月請われて中部電力副社長在任のまま建設所の初代所長に就任（電発理事待遇、28年5月副社長辞任、取締役就任）、長年の夢を結実させたのであった。

佐久間建設所長退任後の31年5月取締役を退いた石川は、中部電力顧問に就任して、さらに水力開発の指導に当たっていたが、34年9月9日突然襲った心筋梗塞の発作のため急逝した。享年72歳であった。中部電力はその功績に報いるため、社葬を営むことを決定。葬儀委員長井上五郎（社長）はその弔辞の中で「あなたの歩いてきた道は、まことに「流れとともに」の一生であり、中部地方の河川にあなたの足跡至らざるなく、谷間の小石や、一木一草に至るまで逞しかった足音に思いをいたして、悲しみに涙しているだろう」と述べ、その死を悼んだのであった。

30年秋藍綬褒章受賞、没後正六位に叙せられ、勲四等瑞宝章を贈られている。

その偉大な業績から、雲の上の人のように思われがちな石川の人間的な一面について、北海道から就職試験を受けに来た山田一嘉（28年入社、浜岡原子力発電所次長、立地環境本部、渉外部長、水力部調査役など歴任、59年定年）は面接を受けたときのことを「話がすすむと脇に控えていた担当者に向かって『この人は遠くから来た人なんだから（結果を）真っ先に電報で知らせてあげなさい』と気を遣ってくれたのが、今でも忘れられない」と懐かしそうに語っている。

（二）私の石川栄次郎観

昭和17年10月筆者が、日本発送電(株)北陸水力事務所（富山市）に入社した当時、石川栄次郎は日本発送電(株)名古屋水力事務所長（名古屋市）として中部地方各河川の水力調査、水力開発の第一線にあり、引きつづいて、中部電力、電源開発と特に天竜川佐久間ダム開発の初代建設所長として、あるいは、中部電力副社長、電源開発理事として、特に中部地方の電力界の大御所として君臨すると共に、人情に厚く部下の指導

育成にきびしいとともに心暖かく、部下から慕われていたと聞いており、特に土木技術者の目標師表として頭が下がる思いが深い。



お孫さんにかこまれた石川夫妻
（昭和29年11月3日）



名古屋高等工業時代の石川栄次郎氏
（明治43年）

(2) 藤本 得



昭和37年6月 飯田支社長（支配人）
昭和39年6月 東京支社長（支配人）
昭和43年5月 取締役
昭和47年5月 常務取締役
昭和50年6月 電気事業連合会専務理事
昭和52年6月 取締役副社長、
立地環境推進本部長
昭和54年6月 取締役副社長
昭和56年6月 常任監査役
昭和55年4月 藍綬褒章
平成元年6月 顧問
平成3年6月 中部電力(株)退任
昭和61年11月 勲三等瑞宝章受賞
平成10年12月8日 逝去（86才）

(イ) はじめに

本稿をまとめるにあたり中部電力(株)取締役土木建築部長宮口友延氏から「電力土木人物銘々伝（中部電力）」「藤本得の業績」等送っていただいた資料にもとづいて藤本得の略歴、業績と人となりを掴み得た。

心から感謝申し上げます。

筆者が北陸電力勤務中富山火力発電所建設にあたり、当時中部電力(株)知多火力発電所の建設現場等の資料収集の為お伺いした際に直接、間接に中部電力(株)常務取締役藤本得並びに関係の方々にご指導をいただいた。改めて感謝申し上げます。

(ロ) 藤本 得の年譜

明治45年4月1日 兵庫県に出生
昭和11年3月 東京大学土木工学科卒業
昭和11年4月 矢作水力(株)入社
昭和15年7月 日本発送電(株)引継入社
昭和26年5月 中部電力(株)引継入社
中部電力平岡水力建設所長
昭和27年1月 本店施設部土木工事課長
昭和33年3月 本店建設部計画課長
昭和34年6月 本店工務部次長

(ハ) 業績と人となり

平成3年、8年間務めた常任監査役を退任し、顧問に就任した藤本得（11年矢作水力入社）と中部電力との結びつきは、日本発送電が平岡発電所（天竜川）の建設工事を再開（24年8月）するに当り、彼を建設所長に起用したときに始まると言っていい。26年5月中部電力発足と同時に、そのまま「中部電力」平岡水力建設所長に。爾来連綿40年、中部電力と藤本得をつなぐ、この運命の糸は、切れることがない。

この間純粹に土木技術者として過ごした期間はさほど長くはないが、平岡発電所の早期完成や、大井川総合開発計画の策定などは、技術者藤本得の存在に負うところ大なるものがあり、また、土木部門を離れてからも、社内外の幅広い分野で活躍を続けている。

渇水期の供給力に不安のある新会社にとって、平岡発電所を一日も早く完成させることは、最も緊急の課題の一つであった。藤本得所長は、福島慶一（土木課長、後高根建設所長など）、渡辺一郎（後、馬瀬川水建所長など）、彦坂六男（後、水力室次長など）らと共に、資材調達難を克服して計画通り、この発電所を完成させた。

平岡発電所はその後の増設により、最大出力は10万1千kwとなり、現在も、水力では中部電力第2位の年間発電電力量を誇っている。

平岡の建設を終えて27年、土木工事課長となった藤本は、欧州視察旅行中に見聞した中空重力式ダムを、大井川の形地点に適用することに執念を燃やし、30年1月、ついに我が国で最初にこのタイプのダムを建設することを社長に決断させることに成功した。

電気出身である当時の社長井上五郎は、後に自叙伝の中で、このことに触れ、「原理がわかって、日本のような地震国で、これを採用するには重大な決意が要る。私は技術者として、この採用に断を下した。結果については密かに誇りを感じている」と記している。

工務部次長を経て、37年飯田支社長（支配人）となったときには、戦中戦後を通じて自らも因縁浅からぬ天竜川の堆砂問題について、地域住民との間に継続的な話合いの道を開き、39年から4年間務めた東京支社長時代には、29年以来10年ぶりの申請となった料金の改定（39年10月申請、翌年3月認可）を手掛けた。

43年からは、取締役（47年常務取締役）として総務部用地部等を官掌、四日市公害裁判に関しては、企業側責任者の1人としてその街に当たり、50年には電気事業連合会長に就任した加藤乙三郎社長に従って、同専務理事に転じ、2年間これを補佐、52年4月中部電力へ復帰、同6月田中精一社長誕生と同時に副社長に就任した。

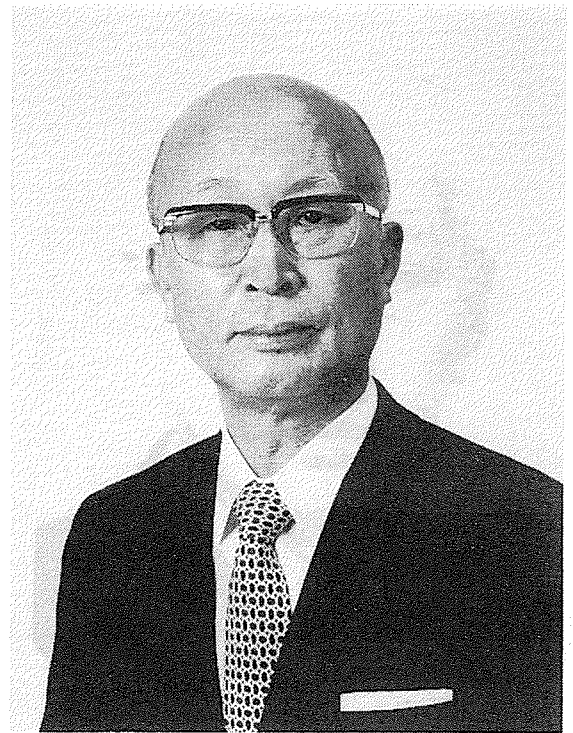
56年には、商法の改正によって、飛躍的にその権限が強化された、常任監査役に就任。総会でのプロ株主の意地悪な質問をサラリと受け流す呼吸は、他の追随を許さないものがあった。

「屋外遊技は一切駄目だが、屋内遊戯なら、全てOK」年はとっても麻雀だけは万年青年、徹夜も辞せずと意気軒昂であった。

(二) 私の藤本 得観

筆者が北陸電力富山火力発電所建設にあたり、当時中部電力(株)知多火力発電所の建設現場等の資料収集の時、お伺いした際の印象と、井川の中空重力式ダム、火力発電所、原子力発電所さらにその後の会社幹部としてのさまざまな業績と人間性に頭がさがる。御指導を心から感謝する。

(3) 村田 清逸



中電コンサルタント社長時代
(昭和47年)

(イ) はじめに

本稿をまとめるにあたり、中国電力(株)土木部長山本健氏、御令室の村田栄子さんから、「電力土木人物銘々伝（中国電力）「広島合併元五日市町長村田清逸」等資料、写真等送っていただき、村田清逸の略歴、業績と人となりを掴み得た。心から感謝申しあげる。

筆者が北陸電力に在職中、中国電力(株)土木部長村田清逸に直接、間接に御指導を受けた。特に暮の村田清逸としての印象が今でも強く頭に残っている。御指導を心から感謝する。

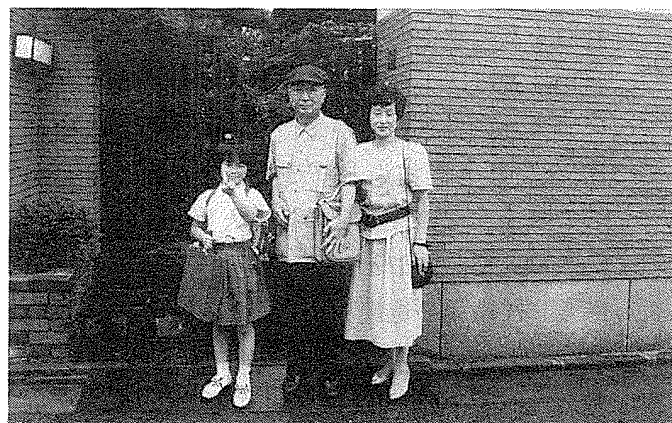
(ロ) 村田清逸の年譜

大正2年9月 山口県に出生
昭和13年3月 東京大学土木工学科卒業
昭和13年4月 九州水力電気(株)入社
昭和14年4月 日本発送電(株)建設局土木第二設計係
昭和14年9月 建設局黒部水力工事土木係
昭和16年10月 建設局栗山水力建設所土木係
昭和19年8月 建設局土木部第二課

昭和20年 4月 本店土木部土木課
 昭和20年 7月18日 日本発送電中国支店
 土木部工事課
 昭和21年 2月 中国支店岡山地区電力所土木課長
 昭和22年10月 中国支店神野瀬水力発電所
 建設所長
 昭和25年 5月 中国支店森原水力発電所建設所長
 昭和26年 5月 中国電力(株)引継ぎ入社
 森原水力発電所建設所長
 昭和27年 2月 土木部計画課長兼森原建設所長
 昭和31年 3月 土木部土木計画課長
 兼柴木川建設所長
 昭和34年 5月 土木部次長兼滝山川建設所長
 昭和37年 5月 中国電力、土木部長
 昭和43年 2月 中国電力島根原子力建設準備
 本部長
 昭和45年 2月 中国電力島根原子力発電所建設
 本部長
 昭和45年 5月 取締役を退任、
 中電技術コンサルタント社長、
 以降相談役、顧問就任
 昭和56年 3月～昭和60年 3月 五日市町長就任
 昭和60年 3月 広島市合併成り退任
 昭和63年11月 逝去(75才)
 昭和50年11月 藍綬褒章受賞
 (趣味) 囲碁五段



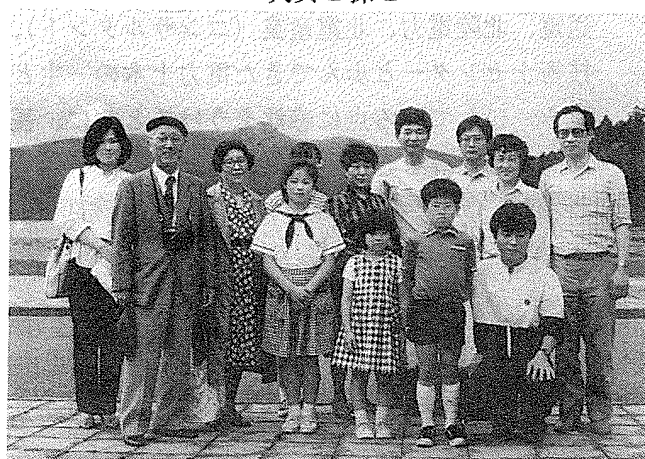
最後の土木学会にて
 (昭和63年10月 逝去1ヶ月前)



次女と孫と

(ハ) 業績と人となり

昭和20年 7月18日 日本発送電本店土木部土木課から、中国支店(広島市)土木部工事課に転任。原爆の前日 8月 5日広島市へ着任した。(31才) 着任の翌日出社直前原爆を受け、瀕死の重傷を受けた。20年12月病癒えて復職、21年 2月岡山電力所土木課長に任命された。爾来、神野瀬発電所、森原発電所建設所長等を歴任し、昭和26年 5月中国電力(株)へ引継入社、27年 2月中国電力、土木部計画課長に就任し、太田川一貫開発計画を推進。柴木川発電所、滝山川発電所建設所長等を歴任の後、昭和37年 5月土木部長に就任。昭和43年 2月から昭和45年 2月まで島根原子力発電所の建設準備本部長および建設本部長として現地で指揮をとる。昭和



昭和60年 子や孫とともに

45年 5月、中国電力(株)取締役、中電技術コンサルタント(株)常務取締役に就任。昭和46年から昭和54年までの間、中電技術コンサルタント(株)社長として、草創期の経営基盤作りに尽力。昭和

47年5月、中国電力(株)を退社。

その後、昭和56年から60年までの間、合併か単独市政かをめぐって、果てしない政争が繰り広げられた五日市の町長に就任し、同町と広島市の合併を断行した。この五日市町の合併をめぐる村田町政の壮絶な戦いのドラマは、自著「広島合併」に詳述されている。

昭和50年藍綬褒章を受ける。

昭和63年11月逝去。75才。

(二) 私の村田清逸観

「広島合併」(元五日市町長村田清逸)の「第2部私の遍歴」を読んで全く感動した。

特に村田清逸は昭和13年電力界に入り、筆者は昭和17年電力界に入ったので、4年間のずれで、村田清逸が一生取り組んだ経験とほぼ同じ様な経験をして来たからである。

村田清逸は、入社直後、平井弥之助からの栗山建設事務所での厳しいが愛情に満ちたしごきのお陰で、「生きた技術と経済の厳しさを学び、そのことが、その後の私の技術人生にとって得難い教材となったこと。」

さらに終戦後の電産労働組合との問題、水力開発全盛期から、火力、原子力開発への転換期の電力土木幹部の苦悩、さらに中国建設コンサルタント創生期の展望、苦慮等、筆者が、日本発送電、北陸電力、北電産業(コンサルタント)、技術士センターと歩んできた電力土木の一生と軌を一にしている点に感銘をうけると共に、長い間の御指導を心から感謝する。

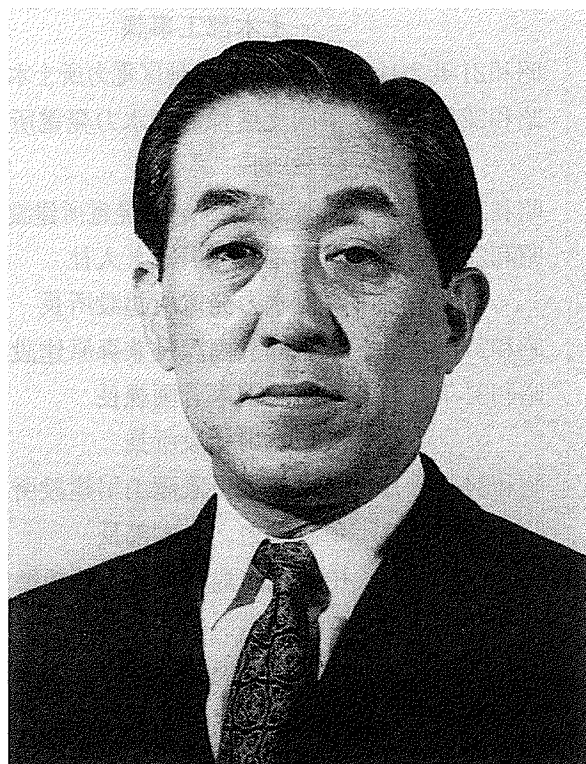


中国電力土木部次長時代(昭和35年)



中電コンサルタント時代(昭和47年)

(4) 後藤 壮介



(イ) はじめに

本稿をまとめるにあたり東北電力(株) 理事 土木建築部長多田省一郎氏、御令室の後藤真砂子さんから「電力土木人物銘々伝(東北電力)等資料、写真等送っていただき、後藤壮介の略歴、業績と人となりを掴み得た。

心から感謝申し上げます。

筆者が北陸電力に在職中、奥只見ダム等、後藤壮介が心血をそそいだ現場等、見学した際、直接間接に後藤壮介所長並びに関係者の方々にて御指導をいただいた。

改めて感謝申し上げます。

(ロ) 後藤壮介の年譜

大正3年10月23日 埼玉県に出生

昭和12年3月 東京大学土木工学科卒業

昭和12年4月 東北振興電力(株)入社

昭和16年12月 日本発送電(株)引継入社

昭和26年5月 東北電力(株)引継入社

建設局土木建設部土木工事課長

昭和26年11月 柳津発電所建設所次長

兼片門発電所建設所次長
 昭和27年8月 柳津発電所建設所長兼
 片門発電所建設所長
 昭和29年2月 建設局会津現業部付部次長待遇
 昭和29年6月 電源開発(株)へ出向、
 田子倉建設所技師長
 昭和32年3月 電源開発(株)田子倉建設所長
 昭和35年7月 東北電力(株)建設局水力建設部長
 昭和38年8月 労務部長
 昭和39年5月 取締役就任労務部長
 昭和41年5月 取締役企画室長
 昭和43年1月 常務取締役企画室長
 昭和50年5月 退任
 昭和50年5月 東北発電工業(株)社長兼
 東北ポール(株)社長
 昭和56年5月 東北発電工業(株)会長兼
 東北ポール(株)会長
 昭和58年2月18日 逝去(69才)
 昭和50年9月 藍綬褒章受賞

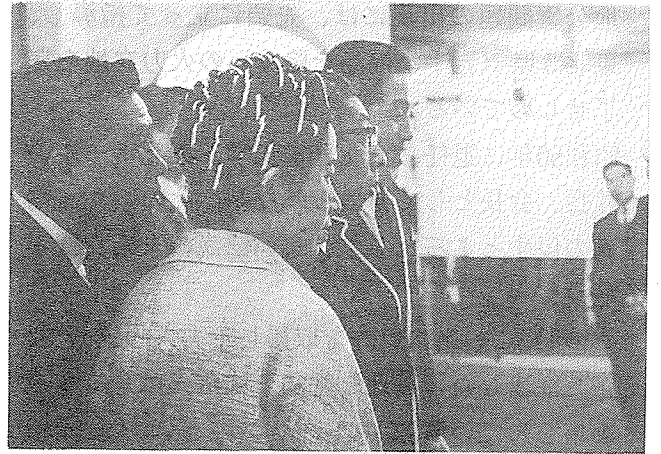
(ハ) 業績と人となり

昭和12年東北振興電力入社早々に、生保内、神代の建設に従事し、矢筈しい先輩にもまれて、生来のヤンチャに磨きが掛り、後年のサムライに昇華した。

日本発送電に承継されて2年の本店勤務の後東北支店に移り、東北電力に承継されるまでの8年間は、北松-後藤のコンビで只見川に真正面から取組み、危険を冒して山に入り現地調査を督励、計画取りまとめに当たった。

東北電力承継後、土木工事課長から、柳津片門に出陣し、所長として竣工後の昭和29年から電発に出向して、昭和35年に復帰するまでの間、田子倉建設所技師長、平井、北松両所長の後を承けての所長として、当初予算内で仕上げた功績は知る人ぞ知る。

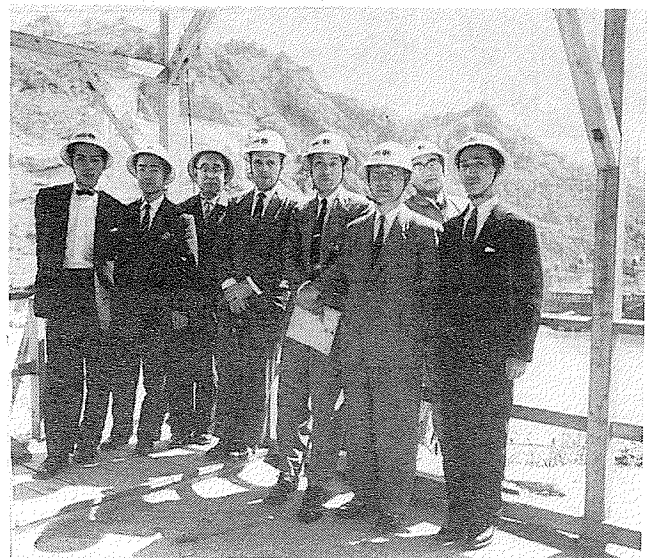
竣功式の栄を第4代五十嵐信一所長に譲って東北電力に復帰後は、水力建設部長を務め、昭和37年に「東北に骨を埋める覚悟」で単騎就任された平井寛一郎社長の信任を得て、新機構の労務部長から企画室長、常務として、産業構造の変革に伴う東北電力の事態改善の一翼を担った。



昭和34年夏 高松宮御夫妻と



昭和36年 大ダム会議の帰途、
グランドクリーダムにて



昭和33年 田子倉ダムにて

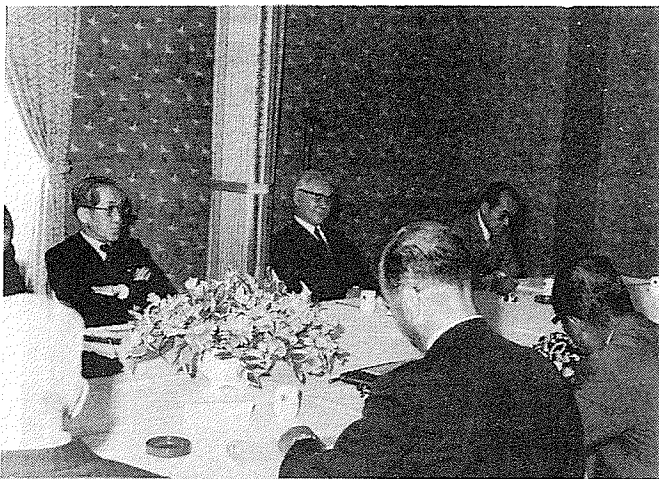
就中、当時ようやく社会問題化しつつあった立地公害問題の出現には、先頭に立って指導し、東北5県（岩手、福島を除く）の火力立地を完了せしめている。

昭和50年に退任、東北発電工学、東北ポールの社長、会長として務められたが、此の頃から宿病の侵すところとなり、永い闘病の末昭和58年病没。

この間、この為に免許を取得した夫人の運転で、曾て従事した建設地を歴訪、知る人は全て早逝を惜しんでいる。

(二) 私の後藤社介観

筆者が北陸電力で神通川第二、第三、九頭竜川水系ダム等工事を担当していた際、柳津、片門、田子倉建設所長さらに富山火力建設の際、新潟火力、仙台火力、能登原子力調査の際、女川原子力等現地及び本店を数十回訪問した際、後藤社介、及び関係の諸兄に大変お世話になった事を今思い起こしている。心から改めて感謝する。



昭和57年 日コングループ社長会

(5) 泉 悟策



(イ) はじめに

本稿をまとめるにあたり、中国電力(株)土木部長山本健氏、御令室泉トシ子さんから「電力土木人物銘々伝（中国電力）」等資料、写真等送っていただき、泉悟策の略歴、業績と人となりをつまみ得た。

心から感謝申し上げます。

(ロ) 泉悟策の年譜

大正3年5月 京都府に出生
昭和9年3月 金沢高等工業学校土木工学科卒業
昭和9年4月 広島電気(株)入社
昭和14年7月 日本発送電(株)建設局広島出張所
昭和15年1月 澄川水力建設所土木係第一工区
昭和16年8月 澄川水力建設所土木係第一工区主任
昭和19年6月 建設局広島出張所土木部工事課調査係
昭和20年4月 中国支店土木部工事課調査係
兼総務部資材課資材係
昭和21年3月 中国支店広島地区電力所土木課

昭和22年10月 中国支店広島支社土木課
土木係長

昭和23年12月 中国支店土木部水路課第二係長

昭和26年 5月 中国電力(株)に引継入社
土木部水路課改良係長

昭和27年 2月 中国電力土木部計画課
総括部長

昭和30年 2月 土木部土木課副長

昭和30年 4月 土木部計画課滝山川調査所長

昭和31年 7月 滝山川水力発電所建設所
次長兼土木課長

昭和34年10月 新周布川水力発電所建設所長

昭和37年 4月 土木部付兼新周布川水力
発電所建設所長 本店課長待遇

昭和37年 8月 企画室調査役 本店部次長待遇

昭和39年 2月 土木部次長

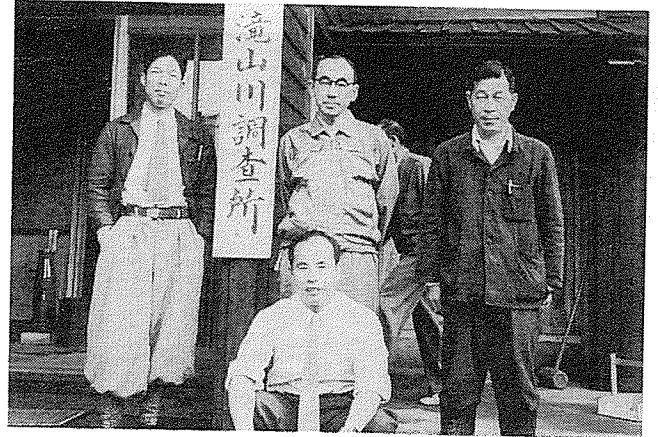
昭和39年12月 新成羽川発電所連絡所次長

昭和43年11月 新成羽川発電所建設所長

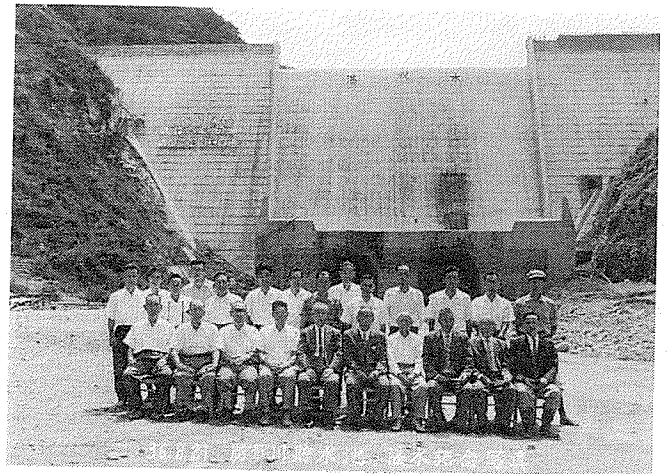
昭和44年 2月 社長室付

昭和44年 5月 定年退職

昭和47年11月 8日 逝去 (58才)



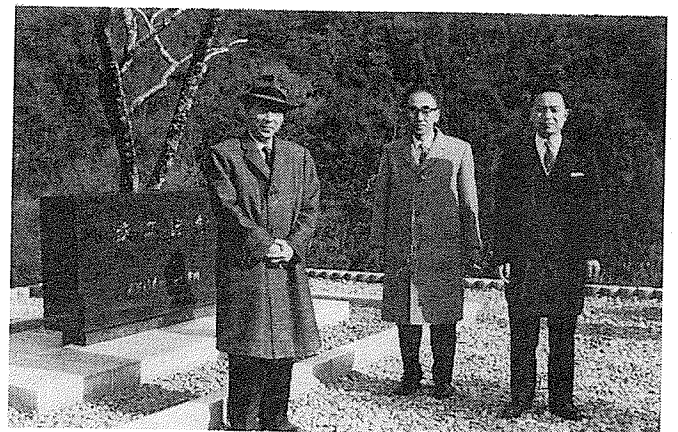
昭和30年 滝山川調査所長時代



昭和36年 周布川貯水池 湛水記念

(ハ) 業績と人となり

昭和16年日本発送電澄川水力建設所第一工区主任 (27才) から、中国電力滝山川調査所長、所次長、ついで新周布川水力建設所長、新成羽川建設所長と電力土木に一生をかけて、立派な成果を残した。特に滝山川発電所建設所時代太田川水系の発電増強の為玉泊ダムの10m嵩上工事、さらに新周布川建設所長として、周布川第一発電所、周布川第二発電所の建設、さらに混合式揚水発電所の建設を主軸とする成羽川水系の3水力開発として、高さ103mの重力式アーチダムの新成羽発電所、及び田原発電所、黒鳥発電所の新しいタイプの発電所建設に貢献した事は特筆に値する。



昭和36年 新周布川建設所長

(ニ) 私の泉悟策観

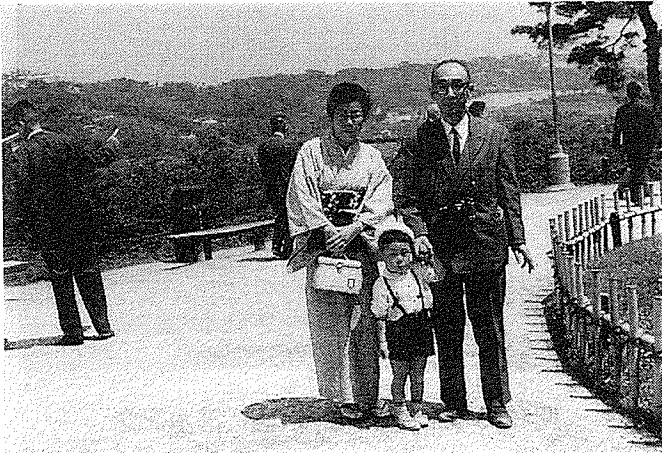
筆者の金沢高等工業学校の8年先輩として、日本発送電、中国電力時代、直接間接に指導をうけた。心から感謝する。特に今回御令室泉トシ

子さんから多くの写真をいただき一部を掲載させていただきました。心から感謝する。

(6) 田代 信雄



昭和43年 新成羽川建設所長



昭和39年 金沢兼六園にて



昭和46年 8月 泉家の兄弟会



(イ) はじめに

本稿をまとめるにあたり、九州電力(株)溝辺哲水力開発課長、田代信雄氏、甥の田代襄二氏から「電力土木人物銘々伝(九州電力)」等、資料、写真を送っていただき田代信雄の略歴、業績と人となりをつまみ得た。筆者は昭和50年九州電力副社長の田代信雄氏をお尋ねし、当時纏めた電力土木の歴史、第1部各河川水力開発の変遷—九州地方—の資料等についていろいろ御高説をお聞きした事を心から感謝している。

田代信雄氏は87才で福岡市で御令室温子さんとお元気である由、甥の田代襄二氏からお聞きしており、資料、写真等お送りいただき心から感謝申し上げます。

(ロ) 田代信雄の年譜

- 明治45年 1月 福岡県に出生
- 昭和11年 3月 東京大学土木工学科卒業
- 昭和11年 4月 東邦電力(株)入社
同社白川発電所建設所
- 昭和14年 1月 同社下原発電所建設所

(以下次号につづく)